

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4490400035		
法人名	社会福祉法人 光薫福祉会		
事業所名	グループホーム ビハーラ豆田		
所在地	大分県日田市港町8-36		
自己評価作成日	平成30年7月21日	評価結果市町村受理日	平成30年11月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	福祉サービス評価センターおおいた		
所在地	大分県大分市大津町2丁目1番41号		
訪問調査日	平成30年9月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

○入居者の半数以上が90歳以上と年齢層が高くなりつつあるが、共同生活として調理、掃除、洗濯物干し等や草花、農園の手入れなど各々が自身の役割として活動している。
 ○OBPSD(認知症周辺症状)に対しても環境、水分、内服薬等を分析しケアに転換する事で症状の軽減に努めている。
 ○ホームでの見取介護を行っている。今後も入居者の急変時に備え日々の体調を把握し、また主治医と連携しながら真心を持って支援します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・食事は毎食事業所内で作っている。利用者と一緒に下ごしらえや後片付け等を行っている。
 ・毎月自宅を訪問して、利用者の毎日の様子を伝えたり施設への要望を聞いたりして家族との関係を密にしている。敬老会や忘年会に家族を招待して家族同士や事業所とのつながりを深めている。
 ・公民館で介護について出前講習を行ったり小学生の下校の見守りをしたり、地域と共生しているとの思いで地域とのかかわりを大切にしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を玄関、事務所、各フロアに掲示し、毎月会議冒頭に職員全員で唱和することで、理念の確認及び認識・共有を行ない、地域生活の継続支援と事業所と地域の関係性を重視した理念を大切にしている	玄関や事務所に理念を掲げ、月始めにある職員会議で唱和して再確認している。地域住民を大切に、地域と共生しながら利用者の望む生活が送れるよう、理念の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内自治会に加入、毎年隣保班の総会等行事に参加、地域向けに広報紙も発行している。また、地域住民を対象とした介護者教室を出張講座にて公民館で行っており地域の方が少しでも参加しやすいよう動いている。今年度より町内ゴミ拾いや利用者と一緒にスクールガードを行っており事業所＝地域と共生している。	保育園の夏祭りや子供の夕涼み会に参加したり、ボランティアの演奏会や小学生の総合学習を受け入れたりしている。月1回小学生の下校見守りを、利用者とともに実施して地域に貢献している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小中学校の社会学習や福祉人材センターより職場体験受入れを行っており、児童から社会人の福祉学習の場として事業所を開放している。また、SOS徘徊模擬訓練や認知症啓発の寸劇を他の事業所職員と合同で行っており、各方面にて活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	偶数月に開催し、事業所の活動内容(行事、職員研修、事故報告)を報告している。また、年度初めには消防署員も参加し防災関連の助言や避難訓練の指導も受けている。地域、他機関と会議を通して連携し事業所運営を行っている。	家族・自治会長・民生委員・市・包括支援センターが参加し、意見や助言を受けている。包括からの体験利用を受け入れ、実績を報告したらとの助言や、利用者毎の対応の仕方の事例報告などがあり、この会議を活かしサービス向上に役立てている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	行政担当課との密接な連携は常に心掛けており、サービス上の相談には明確な助言も頂いている。また、定期的に同業者との会議、外部研修にも参加、研修会場の提供等、事業所の指針役として協力していただき、一緒にサービス向上を目指している。	何かあれば常に市に相談して連携を図っている。研修会の会場を市より提供されたり、法改正についてグループホーム協議会でも疑問が解決しない時は、相談して助言を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、「身体拘束ゼロへの手引き」をもとに身体拘束研修を実施。BPSDには必ず背景(原因)があり、専門職として背景を考え根拠に基づいたケアを行っている。施錠せず何時でもベランダや畑、野外に自由に外出できる。	毎年内部研修を行い、身体拘束しないケアに努めている。玄関は日中施錠なしで自由に行動できる。夜間のみ施錠している。帰宅願望の大きい利用者に対しては、家族了承のもと一晩のみ施錠するが、行動は自由とすることを基本にしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待研修を毎年行い、日常の業務の中でも、申し送り等で日々利用者を観察し身体及び精神状態を把握している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、職員研修で権利擁護の勉強会を行っていた最近行えていない。後見人制度が必要なケースは介護支援専門員より家族に成年・任意後見等の説明をさせて頂いている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約または改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の前に、必ずご本人様、家族に施設に見学に来てもらい、施設の設備、雰囲気を見てもらうよう全ての方に勤めている。要望があれば日中や夜間の体験利用も可能。また、契約の段階でも時間を掛け重要説明事項説明、料金説明や起こりうるリスクや重度化、看取りに対する説明も行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月自宅訪問し、普段より家族から意見を聞くようにしている。また介護相談員を通じて、利用者の相談及び利用者・家族の立場に立った意見を参考にしている。家族にはサービスアンケート郵送し無記名にて返信して頂き、サービス内容の評価を行なって貰っている。アンケート内容や要望等は職員会議にて議論し、運営推進会議等にて報告している。	毎月自宅を訪問して利用者の毎日の様子を報告している。家族に対して敬老会や忘年会に招待し交流を図っている。またアンケートを取って家族から意見を出してもらっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や管理者と年2回個別面談を行うことで、要望や意見を聞くようにしており、徐々に全職員で統一した意識を持ち始めている。	職員会議やミーティングで職員から意見を聞いている。ベッドは手動式であるが、電動式の方が便利なこと、リクライニングイスが欲しいなどの要望が出て実現が検討されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課を行い、個々の実績や努力を十分考慮した上で賞与は反映している。又、各種の手当等を設けており労働環境を整える。個別でも、職員に上半期、下半期に分けて目標を持って業務に取り組んでもらい、管理者が目標達成確認を一緒に行っており、今後も常に職員のメンタルケア等を意識しながら事業に取り組みたい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の立場、経験に沿った研修計画を作成し、人材育成に取り組んでいる。新人職員にはエルダー制度を取り入れ、個人の能力に合わせて勤務内容を組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会の中で、常に情報交換及びサービス困難時の解決指針を頂いている。また、職員育成を目的とした研修企画・開催を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用相談の段階より、相手方の相談内容を傾聴し親身に受け止めている。また、サービス開始に繋がっても常に、生活状況を把握する様、日頃からなげない世間話やお茶の時間等を利用して、コミュニケーションを取り、本人の求めている不安を理解しようと努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	当初はご家族が求めているものを把握し、事業所としてはどのような対応が出来るか、出来ないか事前に話しをしている。また、相談内容をゆっくりに聞くことによって、相手方の今までの状況及び不安や介護の負担感などを受け止めるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、本人、家族が必要としているサービスが出来るように努め、必要に応じ、地域のケアマネージャー及び、地域包括支援センター等他事業所に相談し連携も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	常に利用者自身が持っている“強味、出来る事”を生活の場で活用している。利用者同士で食事や落ち着かない方への声掛けをして頂き、ホームの中で家族に関係が出来ている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	常日頃より家族と面談しており、日々の様子を報告しており、自ずと家族と事業所間の隔たりが無くなり何事でも相談出来る関係になっています。その中でさり気無く外出・外泊支援も依頼し家族との潤滑油になるよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	全員が行きつけの理美容室にて整髪を行っている。今は髪型を上手く伝えられなくても、長年通った理美容室の店員さんが利用者の性格、季節に応じた髪形を覚えており、上手に対応して頂いている。	ほとんどの利用者が行きつけの美容室を利用しており、行けない方でも知人の理容師が訪問してくれる。友人を敬老会に招待し、関係の継続に努めている。職員が同行して自宅に行ったり、近くの人と話すなど馴染みの関係が絶えないようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気が合う方、合わない方がいるのは当然の事であって同じ生活の場を共にすることは現に難しいが、職員側がどれだけ円満な関係に支援し、さりげないサポートが出来ると心がけている。又、食事やお茶の時間には、職員も一緒に参加し様々な会話やコミュニケーションが出来るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者が亡くなり、契約が終了してもお線香をあげに行ったり、またご家族が同じ境遇の親族にホームを紹介して頂いたことが有る。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者に担当職員が付いており、部屋の模様替え、衣類の整理、嗜好品や日用品購入と日常生活全般の支援をしている。意思疎通が難しい方には、家族よりより深く以前の性格、趣味等を聞いたうえで支援者全員で協議し対応している。	入居時家族からこれまでの生活歴や好みを聞いている。利用者一人ひとりに担当をつけ、日々のかかわりの中で利用者が何を思い感じているのか気づき、計画書に反映している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々の生活歴や以前のライフスタイルは、利用者の人生そのものであり重要視しなければならない事でもあるので、本人、家族との会話の中で知りえた情報は、職員間で共有しプラン、支援に反映している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の有する力を生かし、本人がまだ持っている可能性を諦めず安心して日常生活が過ごせるよう日々の記録をし健康、精神状態等把握している。また、出来ない事より出来る事に着目し残存機能を最大限に生かせる様、役割を持った生活が出来よう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	生活の中での言動や家族の思い、職員の情報等を把握した上でプラン作成に反映している。また、毎月行なっているカンファレンスシートを用いて介護計画作成時に話を行い、家族の意見も積極的に聞いている。	担当職員に状況をカンファレンスシートに書いてもらいプランに役立てている。毎月感じたことの記録をモニタリングして職員全員でその情報を共有している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の介護記録にその日の行動、言動及び経過が分かるよう記録している。また、食事量、水分量、服薬確認、排泄状況の確認を行い職員全員で日々の情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて通院や送迎、外出時付添い等行い、個々の満足度を高めるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	昨年より、市内外グループホーム利用者の交流会に積極的に参加している。皆でレクリエーション、民謡歌手のショーの見学と楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用以前より診察を受けていた病院、診療所等、本人や家族の希望するかかりつけ医となっている。病院受診も、基本家族同行となっているが不可能時には職員が代行で行っている。また、看取りを見据えた時期には在宅診療を勧め最後まで支援している。	これまでのかかりつけ医を継続することができる。家族の受診が基本であるが、行けない場合は職員が同行し、結果を家族に報告している。受診がきつくなったときは往診してもらい、訪問歯科も利用している。提携医療機関とも連携が取れている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の健康管理及び異変時は、看護職員の指示にて行っている。記録も熱計表、看護記録にその日の言動、経過、食事量など細かく記入し受診の際は主治医に記録提供し情報共有している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、病院側のMSW,担当NSと密に連絡を取り必要に応じてPT, OTとの情報交換もおこなっている。また、退院時にもリロゲーションダメージを最小限に抑えられるよう退院支援をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り・重度化指針を利用者家族に説明しており、医療面でも往診可能な診療所と協力関係に有る。事業所にて看取り介護事例があり、段階を踏む度に医療、家族と連携のとれた終末期ケアが行えている。	入居時終末期について指針を家族に説明し、重度化した場合は事業所でできる事を説明し同意をもらっている。看取りも行える体制にあり、往診可能な医療機関と提携し終末期のケアにあたっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年消防署、救急救命士より心肺蘇生法、異物除去法、AED操作法などの講習を受講している。又、日勤帯、夜間帯と分けて緊急マニュアルを作成、整備し周知徹底を図っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2ヶ月に1回、日勤帯、夜間帯を想定した避難訓練を行っている。消防署にも年一回は立ち会ってもらい、避難訓練、避難経路の確認、消火器の使い方など利用者を含めて教えて頂いた。又、非常食料、備品を備蓄している。	2か月に1度避難訓練を行っている。運営推進会議の後消防署指導の下、参加者も一緒に訓練を行う事もある。通報・消火・避難訓練を実施する。2階に食料や器具などの備蓄がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常日頃、年長者として敬意払い、援助が必要な時はさり気無く支援している。また、事業所内にて定期的にサービス内容の自己評価を行ないケア向上に努めている。	プライバシー保護の研修は毎年実施され、半年に一度の事業所内サービス評価で職員が振り返っている。家族にアンケートを実施してサービス向上に役立てている。トイレ誘導はさり気なく行われ、申し送りなどは利用者がいないところでなされている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の会話の中で、自然と要望を読み取り介護記録に記入する事で、全職員が把握し希望に副うよう努めている。日頃の食事メニューも定期的に利用者に決めてもらう。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な流れはあるが、細かに時間を区切った過ごし方はしていない。中には、余暇時間に頭の計算、体操、レク等行っている方、一方は、利用者同士で談話、洗濯物干し、調理の手伝い等様々である。又、全ての希望には沿うことは出来ないが出来る範囲「外出したい」と要望があればドライブや散策等行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪は施設では行わず、各々行きつけの美容室に行っている。服装も、個人担当職員が本人と共に買い物に行き、季節に応じた服装を選んでいる。化粧が自力で出来ない方にも美顔支援を行ない何時までもお洒落を楽しんで頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	今年より利用者の誕生日に嗜好品を取り入れた食事やおやつを提供している。また、毎日利用者と一緒に調理、盛り付け、食事、片付け等を通して“食”に対する考えや希望を聞きだす機会をもうけている。	敬老会や忘年会、運動会などには行事食が提供され、回転ずしやレストランなどにも出かけている。稲荷寿司やケーキの飾りつけ、お好み焼きや餅つきなど利用者と一緒に行うなどできる能力を引き出し、作ることや食べる楽しみを継続して行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は毎食ごと水分も随時記録を行い、水分も多く摂取できるよう支援し、日常の中でも、テーブルにお茶をセッティングしいつでも自己で水分補給できるよう環境作りもしている。食事内容も野菜を多く摂れる献立を考え、毎月体重測定も行い管理している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自力にて出いる範囲は各自で行なって頂き、不足分を援助している。また、専用薬剤を毎日使用し義歯洗浄を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録を作成し排泄時間、便有無を把握できるようにしており、排尿排便のサイクル等観察しており利用者一人一人に適した対応をしている。肌着に対しても出来るだけ紙パンツ等を使用しない様、状況に応じて失禁パンツやパット、ナプキンを使用して頂く事で自尊心の配慮を行っている。	パットの当て方を工夫したり、尿意のある人はトイレ誘導したり自立支援に向け取り組んでいる。日中はリハビリパンツで、トイレに座って排泄するよう支援し、リハビリパンツから布パンツに変わった利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表にて排便有無の把握と共に水分補給、食事内容にも留意し繊維類を多く取ってもらい又、牛乳、野菜ジュース、青汁、プルーン等も提供している。気候が良い日は、散策等体を動かす事も意欲的に取り組んでいる。必要時、処方された緩下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は毎日午前・午後を実施。時には気の合う利用者同士入浴して頂いている。石鹸やシャンプー等本人の好みのものを使用している方も多数いる。また、同性による介助者の希望があれば対応している。	2,3日に一回の入浴であるが希望があればいつでも入浴できる体制である。入浴拒否があるときは無理強いせず、時間を見たり日にちを変えたりして自然体で入浴を実施している。入浴剤を入れるなど楽しんで入浴できるよう工夫されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息時にはなるべく静かに短時間ではあるが気持ちよく眠れる様努めている。夜間も各自就寝時間は違い、居室でゆっくり過ごす方、デイルームにて皆と一緒に談話やテレビ鑑賞して休む等生活リズムを考え支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人別ケース記録に内服薬の情報提供書をファイルし、確認できている状態にしている。内服薬変更時には看護職員より介護職員に申し送りがあり情報共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ただ、毎日を淡々と過ごすのではなく、利用者が今まで培った経験と知識を発揮して頂けるよう、“役割”を持った生活が送れる様支援しています。また、食事作りや洗濯、家庭菜園、漬物作り等利用者の経験や知識を発揮できる環境作りや支援を行っている。特に食事の時間になれば自らすんで調理の手伝いや食器洗い等して頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援は随時行っており、ドライブ、日用品の買物をしている。時には家族にも協力してもらい自宅へ外出支援を行っている。	コスモスや滝見物など四季折々にドライブに出かけたり、スーパーに利用者と一緒に買い物に出かけている。家族の協力のもとお盆には墓参りに出かけ、そのまま自宅に泊まったり、希望すればいつでも外泊外出ができる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得て金銭管理が出来る方には自己管理して頂き支払いも自力にて行なっている。家族よりお金を預かり事業所が管理している方でも、外出先で支払時には自分で支払って頂けるような工夫をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望に沿って電話の支援は時間帯を確認しながら対応している。電話がかかって来た際も、スタッフルームであるが個室でゆっくり電話を楽しんでもらっている。友人や家族に絵手紙等のやり取りをしている方もおり、電話も自由にして頂いている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族より頂いた花を生けたり、余暇時間に製作した作品を飾るなど、居心地の良い空間を提供している。	リビングは窓が大きく採光が良い。テレビやソファが置かれゆっくつくろげる雰囲気である。利用者の作品が並べられ、四季に合わせた飾りつけがなされている。全館で温度や湿度など空調がなされ、気持ちよく年中快適に過ごすことができている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下には長椅子を設置。季節による模様替えにより冬場は畳の間を用意しコタツを設置しており、各々横になり休養されたり思い思いの場所で寛いでもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	「宿泊」の居室には、本人に馴染みの有る小物等々、使いなれた物、思い出の品等を持ってきてもらい少しでも自宅と同じ思いで過ごしてもらうように工夫している。又、季節感の感じられるカレンダーや、家族やお孫さんの写真も一緒に飾ってもらっています。	これまで使い慣れたテーブルや小物などを家から持ち込まれ、自宅と変わらない雰囲気を作っている。家族の写真などが置かれ落ち着いた気分になれるよう工夫がされている。目に見えないセンサーを使用して利用者の安全を確保している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりを良く観察し、利用者の身体能力や出来る範囲を把握し、出来ることはあえて介助はせず見守り、難しい場合はさりげなく手を貸すよう心がけている。		